



新養蚕を 現地に見る

北原さんと本田さん
の場合

養蚕業が「斜陽産業」などといわれながら、いまなお伸びやんでいる。いったいその原因はどこにあるのでしょうか。

桑一蚕一繭から生れた製品の「絹」が国際的商品として十分な価値をもつていながら、合成繊維製品の擲頭や繊維業界の激しい競争からハミ出したといえ、それまでのこと。しかし、もつと根本的原因が養蚕家の経営方法にあることに大きな眼を向け、そこから生れた反省と批判によつて新しく立ちなおる姿を、これから追つてみたいと思います。

養蚕業の背景にあるもの

最近、ナイロンをはじめビニロン、テロンなどという合成繊維製品が大量の日常生活にもはややされてきているのは、何といつても安く強靱というところがおおかたの理由です。一方、「絹はどうか?」といふと、まづク高いというところが主な原因となつて、それらの人たちが敬遠されているのが現状のようです。

その上、従来の米国向けの輸出が、その国の市場の不況などによつて次第にうすれてゆき、けつきよく、絹製品は国内はもちろんのこと、国外からの需給事情によつてもふるわなくなつてきたことが結論的にいえると思ひます。

従つて、このような状況の中で、現在の生産をやつておられる養蚕農家の方々が、いつたような方法によつてこの不況を切りぬいていかねばならないか、ということがもつとも大きな関心事であり、命題でもあるわけです。

そこでこの難題を解決してゆくために

従来から行われていた養蚕(これを慣行養蚕といふ)を根本的に検討したところ、その経営方法がきわめて保守的で、農業経営から遊離したところに大きな労力のムダや経費の負担をかゝっていることがわかつたのです。

このような問題を捉えて、養蚕をより合理的にそして有機的に農業と結びつけてゆきながら、生産された繭が農家の利潤を保ちつゝ、コストの引下げに向つて立ちなおろうというのが「新養蚕」の方向ともいふべきなものです。

新養蚕とは

では、「新養蚕」とはどのような内容をもつたものか……すこしくわしく説明しますと、養蚕を農業経営と密着させることを前提として

- 1 ムダな労働力(桑園経営のためにとくべつに使われていた労働力)をばぶき、そのぶんを農業経営の方へ廻しながら
- 2 いつほうでは、桑園の栽培方法を

養蚕家の九八パーセントが戦前から今日まで桑園を持ちつゞけてきたといふのですから、北原さんもその中の一人。

桑園二十アール(二反)のほか、水田(普通作)四十アール(四反)、そ業園芸の普通畑が五アール(四反五畝)、これに役牛として赤牛(おす)が一頭という経営規模です。

この地区の養蚕農協長をやつておられる北原さんは、

「桑園は祖父の代からやつているので、からもう六十年來のもので。新植桑園をやつたのが三十二年の十二月末で、まだ二年目というところ。しかし繭の反当り収量が昨年(九四キログラム)二五貫であつたのが、昨年では(一四六キログラム)三九貫と一段とふえ繭一貫をつくるのに二十貫ほど要つた桑が十五貫ですむようになったのも、やはり新養蚕にもつて科学的、経済的な給桑型式をとり入れた結果だろうと思つています。つまり、蚕がもつとも桑を多くたべる時期は五令期(壮蚕期)といひましてね、全体の七〇パーセントに当るんですが、この場合の蚕の飼育にビニールハウスをとり入れたのです。このビニールは約二反分、二十グラムほどの重さですが、経費は三千八百円です。ただ、温度は常に摂氏の二二度から三二度ぐらいに保つ必要があります、なかなか神経を使いますね。ちよつと時期が悪くてお見せできないのは残念ですが……」

と雨あしの立つている庭を眺めます。「蚕畜一体という意味で北原さんの場合はいかがでしょうか?」

「え、その点の効果も大いにありますね。つまり桑園の間作としては、冬作ではコンモンベツチとえんばく、夏作はグラスダウンと秋大豆……といったふうにならざるを得ない。牛の飼料作物が十分にとれて遠方から運ばずに済みます。それに労働力の節約はたしかに期待ができ、また肥料も殆んど堆肥を使つて水田や桑園に廻しているところなんです」

「桑園も六十年余りとなると、樹令からいへば相当古いものもあるわけでしょうね」

「そうですね、桑の生命も三十年はつゞきますが、理想的には十五年以上もたれば抜根して新植する必要がありますよ。とにかく、七、八年目というのが桑量としてもつとも多い時期ですから……」

この北原さんの養蚕組合では、新農山漁村建設計画の助成をうけて、蚕織の産卵を孵化する催青所を設け、これを村の共同管理場としているそうです。

こゝに蚕の完全変体までの経過を飼育の面から説明しますと、これが一令から五令までに区分されてあり、一令から二令というのは稚蚕期で共同飼育され、三令は中蚕期で普通飼育、そして四令一五令というのが壮蚕期となつてビニールハウスで繭の形をと、のえてゆくことになつてゆく。



南関町(玉名郡)の北原四郎さん

問作の自給飼料で赤牛も気楽に育つ



改めて反当り株数を減らしますと、それだけ手数がへり、その上風とおしや日光の照射がぐつとよくなつて一株当りの質の良い桑葉が倍以上にふえ(従来と較べ株数は減つても桑葉の生産量は変わらないこと)

- 3 栽培期間中の間作(えんばく、コンモンベツチなど)の自給飼料で役牛や乳牛が飼えて蚕畜一体となり、その糞肥をこんどは桑園の肥料へと還元しながら、地力を培養してゆく、だいたい以上のような姿で、養蚕の伸びなやみを打開する唯一の途が生れたのです。

しかも、この新養蚕は、県が県下二十五ヶ所の実験農家の体験を通して、現実に体系化したものであり、昨年から五ヶ年計画(三十七年まで)でその大いなる伸展を上げようということなのです。

そこで、さつそく二ヶ所の実験農家を訪ね、新養蚕とは何か、ということを見地の姿から捉えてみました。

そして、この繭は、春(四月二十五日から五月二十日ごろまで)、初秋(八月五日から二五、六日)、晩秋(九月十五日から二五、六日)、晩々秋(九月十五日から十月十二日)と四回に分けて、十日後に繭出しが行われるわけです。



中央村(下益城郡)の本田一成さん

本田さんは、甲佐の町を出て緑川を渡るとかなり高い丘の上に一家を構えてい

ます。まだ二六才という若さで奥さんに子供さんが一人。農家の経営規模としては、水田が二十三アール(二反三畝)に畠が九十七アール(九反七畝)というのですから、稼働力二人の割合からいいますと大へんなものだ、ということが想像されます。その上、庭先から赤牛の啼き声がきかんに聞えてきますので畜舎をのぞいてみますと、十ヶ月のオスが二頭、四才のメスが二頭、さらに、その乳首のあたりを動きまわつている三ヶ月の仔牛が一頭と、たいへんな賑わいようです。

さつそく、上気の下で、すぐ近くの桑園を見せていただきますと、さすがに、この一帯が繭の発祥地だといわれていただけに、整然と植えてある桑の幹が一面に展がつて見えてきます。

そして、問作にコンモンベツチとえんばくの混播が鮮かないるどりで株と株との列のまん中を敷きつめたような感じだつてきます。ちよつと桑葉の発芽の前で時期外れではありますが、うすい褐色の細い幹が、一様にひと株から五、六本づゝ生え揃つて、陽光に白くかがやいています。

本田さんご自慢の新しい桑……

「面積にしてどのぐらいあるんですか」「三十七アール(三反七畝)というところですが、これを株数になおしますと、十